

令和6年度 第5回岐阜県社会教育委員の会 議事録要旨

1 日時 令和7年1月30日(木) 10:00～12:00

2 場所 岐阜県庁 20階 2001会議室

3 出席者(委員の現在数14人 出席者10人)

<委員>

天野 知子
井上 吉博
岩田 睦巳
酒井 茂
猿渡 真里恵
裁 昭人
堀江 弘美
益川 浩一
山本 真紀
米原木ノ実

<事務局>

県民生活課長 森 信輔
生涯学習企画監 安藤由美子
課長補佐兼係長 片岡 留美
課長補佐 永田千奈津

4 報告

○第3回、第4回岐阜県社会教育員の会について

事務局：岐阜県社会教育推進大会及び岐阜県生涯学習・社会教育総合推進研修会の委員による報告書について説明。

益川委員：岐阜県社会教育推進大会、岐阜県生涯学習・社会教育総合推進研修会において、多様な事例を通じ学ぶところが多かったと推察する。

5 議事

(1) 事例発表による、研究・協議

<発表者> 裁 昭人 委員(下呂市立下呂小中学校運営協議会長)

<演 題> 地域の子は地域で育てる～寝屋子学習を通して～

益川委員：丁寧に取り組まれている姿がよくわかった。地域と学校、子どもたちが地域とつながるために大事にしたいエッセンスが、活動にちりばめられていた。子どもの参画、意見表明、主体性の高まりについては、審議題でも大切にしていきたいことであり、事例には子ども参画の姿が見え、大変参考になった。ご意見、ご質問等いかがか。

酒井委員：寝屋子学習の活動が、夏休み短期集中でということもあったが、どのような時間帯でやっているのか。また、100もの事業所の登録があり、生徒数は約70名。残り30事業所への対応はどうしているのか。

裁 委 員：1年間の予定を立てる際、顔合わせの会などで、短期でやるのか、長期でやるのか生徒は希望を伝える。コンセプトは、子どもと寝屋親が自由に活動を決めるということである。学校から、活動は30分でもいいと伝えてもらったおかげで、子どもたちは、部活終了後などの時間を使うことができた。寝屋子、寝屋親が連絡を取り合い、話し合いながら、活動ができる日時を決めて行っている。学校の先生が関与することはほとんどなく、先生方の負担は軽減されていると思う。活動が当たらない事業所については、来年度以降のお願いをするとともに、活動している事業所と同じように、連絡文書を配付するなどして、関係が切れないように配慮している。協力すると声をあげてくださる事業所を大切にしていくな必要を感じており、注意を払っている。

酒井委員：協力してくれる企業があってこそその活動であるので、そこを理解し大切にしていけないといけない。また、「子どものために」ということだけでなく、企業側にとってもWINがあるので、活動の継続につながっている。学校でなくても子どもを育てる、地域で子どもを育てるというコミュニティ・スクールの根本がこの活動を支えている。地域が本来のコミスクのあるべき姿をよく理解しているのではないかなと思う。そう考えると、コミスクのスタート時、地域に理解を得るまでには、本当にご苦労があったと思う。お願いするだけで終わってしまわない、努力がよくわかった。

益川委員：地域と連携していく上で大事なことは、願いを共有していくこと。熟議、協議を重ねていくことで、その願いをバージョンアップし共有していこうということが根本にあるので、これだけ持続して活動できるのだと思う。また、「WIN-WIN」、「Happy-Happy」というように、お互いの学びとなる活動であることは連携する上で大事である。そして、子どもたちが単に学校からあてがわれたことをやるというのではなく、自分から連絡したり相談に行ったりと主体的な動きが見られた。審議題にある、子どもの参画、意見表明、主体性がすごく表れているよい取り組みである。

山本委員：3年間の活動でなく、2年次の1年間の活動であることが新しい出会いや、活動の継続につながる。また、「あるもの生かし」や「WIN-WIN」の要素が入っている活動もよい。地域性を生かしながらキャリア教育に取り組み、継続し発展させていることがすごいと思う。地域学校協働活動を続けていると生徒会、有志の子どもたちなど、子どもたちが主体的に動けるようになるということを実感している。高山では、防災キャラメル、全校かるた大会など、子どもたち主体で始まった活動がある。また、保護者の立ち位置について、住民としての立場、職業としての立場など様々あるが、「保護者」としてクローズアップするのも必要と感じた。家庭教育、社会教育を切り離すことなく、融合すること。自分の中で整理したい。

益川委員：自分でアポを取ったり調整したりするところから主体性が出てくる。このような活動を積み重ねることで主体性が高まっていく姿がよい。関わる大人たちが、「これならできる」と無理のない範囲で楽しく行っていることが活動を持続可能にしている。保護者の参加についても、同士として精力的に関係をつくりながら活動されている。

堀江委員：「チームねやこねり」は、コミスクの中核を担う人たちなのか。有志なのか。

裁 委 員：学校運営協議会とは別である。立ち上げ1年間は私だけ。実際運営は一人では難しいので、仲間を集めた。仲間を募るときには、肩書のある人ではなく、実際に動きをつくれる人、身近な人を集めた。

堀江委員：チームの中に、観光協会の方などが入っていることは大きい。コミスクにとっても子どもたちにとっても知識を持つ人から学ぶことができる。そのような人たちをコミスクの中に入れるのは難しいと思うが、裁さんが主体的に動き、チームをつくっていることがすごい。生徒会から主体的にやりたいと上がってきた活動について、それは「チームねやこねり」との関わりの中で出てきたのか。

裁 委 員：「寝屋子学習」をやったから生まれたわけでない。学校運営協議会のメンバーに様々な業種の人があり、医療ボランティアについて話題となり生徒会とつながった。コミスクを通して地域の人と話しやすくなる環境が作られていたことが大きい。様々なつながりがあつた中で活動ができていった。

益川委員：制度的なことになるが、「チームねやこねり」が地域学校協働本部ということである。地域学校協働本部の立ち上げ方は地域によるが、ボランティアな人たちの集まりからスタートというのは動きやすく、フットワークの軽さを感じた。また、地域学校協働活動に職業体験の要素を取り入れたことは、地域の企業や事業者との協働を生み出している。ボランティアな形で、緩やかなネットワークが活動を動かしているということがうまくいっている要因であると考ええる。

裁 委 員：チームのメンバーに肩書をあたえると、堅苦しくて、逃げてしまう。そして、他の会のメンバーとは違うメンバーで構成することで、「自分たちが」と集まってくれた。

益川委員：緩やかなネットワークが大事である。岐阜小学校運営協議会も同様。できる人ができるときに活動する。でもつながっている関係。型にはまっていると動きにくい、そういう関係がうまくいくと思う。

山本委員：「寝屋子学習」は中2で実施ということだが、学校でもキャリア教育の授業があるのか。

裁 委 員：キャリア教育の授業として「寝屋子学習」を行っている。学校でも授業はある。「寝屋子学習」に参加しない子は、その分の授業を学校で受ける。「チームねやこねり」に、学校の先生も入っていて調整をしてくださっている。

天野委員：子どもたちは大人と話すことに壁があり、職業体験でも指示を待っているという現状もある。自分たちから寝屋親ときちんと話をし、考えていけば、そういったこともなくなると思う。職業体験を通して気づきがある。また、受け入れる側も子どもたちを通して、見えてくることがある。「WIN-WIN」である。また、事例の中で、保護者には家庭で寝屋子のことを話題にしてほしいとあったが、家族に話すことで、子どもから知らない情報を聞き、それが大人の成長にもつながる。言葉が行き交うということはとても大切なことである。

裁 委 員：保護者には、家庭で話題にしてほしいということと、子どもを褒めてあげてほしいと伝えている。生徒たちの自己有用感を高めてもらえると嬉しい。

岩田委員：保護者の関わりについて、参加してくる子どもたちは、保護者の理解があつて参加で

きている。家族ぐるみで、寝屋子活動を応援しているところが素敵だ。こども基本法などで、こどもの参画や主体性と言われる中、子どもの「やりたい」を実現させている場所は本当にあるのかと思ったときに、ここにはあると感じた。別の視点からいうと、地域学校協働活動のゴールは地域の活性化であると思っている。裁委員が「家族で話題にしてください。飲食店なら食べに行ってください。」と言われたが、食事は家族がつながる場、その場所が地域にあり、その地域が潤っていくよい循環となっている。同じ下呂市にある竹原小学校では、コロナ禍の修学旅行で、地元温泉街に泊まった。子どもたちの感想は、「地元についてよく知らなかった。」であった。知らなかったことを知ることができるし、改めて地域を知ることできる。きっとこの子たちは、下呂にいてもいなくても地元を想う、そんな子どもに育っていくのではないかな。

益川委員：寝屋子学習で活動を行っている本人たちだけでなく、家庭や地域でも効果があるということである。

猿渡委員：PTA役員であれば、地域でいろんな方とつながれるが、そうでいないとつながることがなかなか難しい。それが、子どもを通して地域とつながれるということは、とてもありがたいことである。地域からいろいろなことを教えていただくと、親として自分の子どもを客観的に見ることができる視点となるように思う。また、子どもたちの感想にある言葉は、保護者も意識していなければいけないことであった。子どもを通して親も学ばなければならないと思った。子どもは育ててもらったように今度自分の子どもを育てると思う。愛情をかけられたように、子どもに愛情をかける。地域で育てていただいて育っていく子どもたちは、次の世代に同じことを伝えてくれると思う。これが地域の中で根付き、自分で学んで自分で自分の人生を作り上げていける子どもになる。地域の取組みが、他の地域でも形を変えつつ、地域で子どもを育てていくモデルとなる事例になると思った。

裁委員：組織図の中に、保護者というキーワードは、当初は出ていなかった。しかし、子どもを受け入れた寝屋親から、保護者の顔が見えない、保護者の声を聞けないか、という声があった。保護者へは、子どもを積極的に褒めてほしいということや、チームねやこねりの組織図に保護者が入っている意味等をよく説明している。また、受け入れてくれる寝屋親のことを話題にしてほしいという話もしている。そうすることで、保護者も寝屋親もお互いのことを気かけながら、自分たちだけが頑張っているという思いにはならないようにしている。かける言葉が大切である。

井上委員：保護者の参加の様子について、変容はあるか。

裁委員：保護者は活動に直接参加するわけではない。活動後の感想を聞いている。学校で行う振り返りのシートには、子どもの感想とともに保護者の感想を入れるようにした。保護者に活動のことを気にかけてほしいという思いからである。また、保護者の参加のきっかけとしたい。

米原委員：「可変性」の取組みであるところに感銘を受けた。長く続けているとどうしても固定してしまうが、振り返りをしながら、その都度柔軟に考えていくところがよい。また、

発表を聞きながら、自分が職業人として中学生と1年間向き合うとなったら、何ができだろうと考えた。寝屋親さんたちも、自分の仕事・生業について、地域や世間とどう調和しているか、あらためて深く考えたと思う。その上で受け入れてくださっているのだろうと思った。

益川委員：学ぶところが多くすばらしい取組みである。地域と学校の連携をするときに大事にしなければならないことがいろいろな場で具現されている。また、お互いが世代を超えて学び合う相互学習の視点も大事なところである。チームねやこねりは、緩やかなネットワークで、柔軟にフットワークよく動いているからこそ他の人をうまく巻き込んでできている。情報提供もいろいろな場で行われている。同士、仲間を増やすということで非常に有効である。審議題に関わっては、子どもたち自身がやることや時間を決めるなど主体性が高まる方法をとっている。そして、親が褒めてあげることで自己有用感が高まり、さらに主体性が高まる。その結果生徒会などの自主的な動きにつながっている。社会教育の歴史を考えると、昔は農業をやっている家庭が多く、子どもたちをあえて地域に押し出し、しつけ、育ててもらった。まさに、寝屋子学習は地域で育てる、社会教育の原点のような取組みであるように思う。

（２）ハンドブック作成に係るアンケートについて

事務局：第6回、令和7年度第1回の見通しについて説明。

益川委員：社会教育委員の会の審議題について、アンケートで子ども・若者の生の声を聞いて実態をつかみ、それを生かして協議を進め、成果物を作るということであった。アンケートについて、内容や対象をどのようにしていくかご意見をいただきたい。審議題には、地域住民、保護者ともあるが、特に大事にしたいのは子ども・若者の意見ということではいか。

裁委員：「褒められてうれしかったことは何か」を聞きたい。自己有用感を高めるためのヒントになる。

益川委員：対象は、地域学校協働活動に参加している子どもたちなのか、あるいは全般とするのか。活動に参加している子どもたちを対象にするなら、「なぜ参加したのか」「楽しいことは何か」「友達ができたか」「地域の人との付き合いは増えたか」「何をやってみたか」などどうか。

山本委員：子どもの意見は、生徒会、児童会など集約できるところにお願いするとよい。また、その他の子どもについては、アンケートフォームを使うこともできる。子ども・若者だけでなく、地域・保護者ということで、PTAや地域学校協働活動参加者なども集約できるとよい。

酒井委員：学校によっては、生徒会で集約は難しいところもあると思う。個人で回答できるものがよいと思う。広く意見を聞ける。

益川委員：満遍なく幅広い生の声を聞くことが目的とするのか、地域連携に関わっている子どもたちがどのような思いを持っているのかを聞き、それを生かしていくという目的とするのか。

堀江委員：高校生は選挙権を持つ。自分の意見を持つ。その年代の意見もあるとよい。

裁 委 員：若者とは誰が対象となるか。誰にどうやってアクセスすると答えが得られるのか。子ども、保護者は学校を介してお願いできそうだが。

益川委員：ここでいう若者は、高校生くらいのイメージ。大学生もよいが。

裁 委 員：祭りなど地域行事に参加している子はどうか。

山本委員：活動に参加したことある子、活動を企画したことある子ではどうか。記述でなく、「何に参加しているか」「何を企画したいか」を聞くとおもしろいのかもしれない。

天野委員：20 代後半から 30 代で地域に参加し始めている年代。そのあたりの若者の意見を聞きたい。

益川委員：全国学力・学習状況調査に活用できるものがあつたのではないかな。

山本委員：簡単で答えやすいものがよい。ハンドブックを指針のようなものにするのであれば、今活動をしている事例を対象に、コアに聞くとよい。全体的に幅広い意見としては、子育て支援課の結果を活用し、地域活動に参加している事例のある地域の子どもたちに聞き、まとめていった方がよいのではないかな。ただ調査結果を統計として載せるのか、指針とするのか、活動を紹介して今後につなげられるようにするのかといったように、目的をはっきりさせたい。

益川委員：中学生、高校生、大学生までの子ども・若者を対象としていくことでよろしいか。また、一般的に広く聞くデータは、子育て支援課のアンケートや学力調査等がある。地域と学校の連携に関わっている子どもたちの思いを聞き、審議題を深め、成果物としていくということよろしいか。

岩田委員：「地域の活動に参加しているか」という選択肢から「なぜ参加しているのか」「なぜ参加していないのか」、「どんな弊害があるのか」、と聞いていくことが想定される。「地域で実現したいことは何か」を自由に記述してもらおうとよい。対象は無作為、二次元コードを郵送しアンケートを行う形はどうか。

益川委員：無作為というのは本会ではなかなか難しい。活動している子に対し学校等を通してお願いするという形になるか。参加の有無、参加の理由、「面白かった活動は何か」「何に参加したか」「友達ができたか」「今後、何をしたいか」「今どんな活動をしているか」等を聞く。子どもたちが関わっている地域活動の思いを知ることが目的にどうか。これまでのご意見をもとに、事務局から次回第6回に、方法、対象、内容等の案を提示していただく。実施の際には、委員みなさんにもご協力いただきたい。子どもたちの生の声が聞けることが楽しみだ。

以上、議事が終了したため進行を事務局にお返しする。